

# 第一章

## 少年時代

殉教の地・長崎に生まれて、初誓願を立てるまで



## 提灯で山道を照らしながらミサに通う

私は長崎市の浦上の生まれです。生家は長崎市を見下ろす小高い丘の上にありました。

というのも、私の先祖は江戸時代の隠れキリシタンでした。キリスト教が禁止されていた江戸時代に、長崎では「浦上崩れ」と言って、秘かに信仰を保っていた信者が奉行所に検挙される事件が4回ありました。一番崩れが1790年～1795年（寛政2年～7年）、一番崩れが1842年（天保13年）、三番崩れは1856年（安政3年）、四番崩れは1867年～1873年（慶応3年～明治6年）に起きました。特に四番崩れは、幕末・明治にかけて、内政・外交上の大問題になったのです。

浦上のキリシタンたちは、日本に上陸した神父に信仰を告白。死者を仏教の僧侶の手によらず葬ったことから、主要信徒が投獄され、キリシタン全員が流罪に。しかも、キリシタンが集まると危険だからと、あちこち分散させられたんです。そのことを、私たち信者は「旅」と言っています。旅をさせられる、つまり流刑になったことを指しているのです。私の先祖は鹿児島に流されました。

徳川幕府が倒れて明治政府になっても、キリシタンへの弾圧政策は変わらず、流刑者はそのままでした。当初から、フランスをはじめとする外国公使団は、信教の自由の理念から強く抗議。条約改正交渉のために欧米に渡った岩倉具視の使節団が、各国政府から抗議を受けるなど明治政府も窮地に陥り、1873年（明治6年）に実に259年振りにキリシタン禁制の政策が廃棄されました。これを受けて、流刑者も許されて浦上に帰って来たのです。

しかし、財産は没収されてしまったから、町からはずれた辺鄙な山に登り、そこを切り開いて新しく生活を始めたのでしょ。ですから、私の生家がある山の村は迫害を受けたキリスト教信者の子孫たちが住んでいま

した。

私はそんな信仰の村で、1925年（大正14年）12月に11人兄弟の10番目として生まれました。おまけのようなもんです（笑）。先祖代々の熱心なカトリック信者の家ですから、生まれてすぐ洗礼を受けました。

生家は11人の子供と両親、祖母と一緒に暮らす大家族で、農業で生計を立てていました。父親は畑でジャガイモやサツマイモ、玉葱、トマトなどの野菜を作って、朝から晩まで働いていました。家族を食べさせるのに一生懸命ですよ。母親も14人分の食事を作って、洗濯をして、農作業をして。それだけでも大変なのに、作った野菜を背負って町に売りに行く。売ったお金で必要な食料を買い、子供たちのために果物の残り物なんかも安く買って来てくれたものです。そんな母親を見て、子供心にかわいそうに思っていました。朝早くから働いているのに、夜も夕食の後片づけをして、翌日売りに行く野菜の下準備をしているでしょう。疲れているのだから早く寝ればいいのに、と思っ見ているんですが、なかなか寝ない。そして、夜中の12時頃、寝る前にお祈りをしていました。縁側に座ってロザリオを切っている姿が、とても印象的でした。テレビを見ながら寝ころんでいる、今の母親とは大違いですよ（笑）。

やはり、親の後ろ姿を見ながら育つというのは大切なこと。私も一生懸命働く両親の姿を見て、子供なりに真面目にやらなければと思ったものです。

信仰の厚い家庭で育ったから、自然に教会に行くようになりましたね。小学校4年生ぐらいの時から、毎朝夜が明け切らない5時頃に起こされて、兄弟や近所の人たちと一緒に、提灯で足元を照らしながら、歩いて教会へ通ったものです。教会が遠くて、行きは下りだから早くして30分くらい。帰りは登りで40～50分もかかってしまします。獣道と言って、獣が通るような細いくねくねした山道を歩きました。教会でミサにあずかって、いったん家に帰ってから、小学校に登校。学校が終わると、週3日は教会に行きました。そこで、神様は全能

